

17 ヒト子宮体部腺癌（明細胞癌）培養細胞株（TMCC-2）の樹立とその性状

東京医科大学，佐々木研，杏雲堂病院*
岩淵浩之，作永穂高，猪脇順子，岡部一裕，
奴田原裕一，佐藤博己，根岸能之，秋谷 清，
坂本 優*，杉田道夫*，天神美夫*

【目的】子宮体癌における明細胞癌の頻度は極めて低く，細胞株樹立の報告も少ない。臨床的には治療抵抗性で予後不良のことが多い。今回，基礎的癌研究の材料として有用な子宮体部明細胞癌株TMCC-2を樹立し，その特性について検討した。

【方法】子宮体部明細胞癌患者の手術標本より，ディスパーゼ処理後重層比重遠心法で分離した腫瘍細胞を，10% FCS加RPMIで培養し，クローニングすることなく株化に成功した。以後約5カ月で21代目を継代している。その細胞生物学的特性に関しては，形態学的観察，増殖特性，染色体分布，G-band karyo typing，PI染色後，flowcytometryによる核DNA量の測定，異種移植能の検索を行い，また免疫学的特性に関しては，培養上清中の腫瘍マーカーをRIA法により測定した。

【成績】①培養細胞は，多稜形で細胞質内空胞を有し，著明な核小体を2～3個有する。敷石状配列で，容易にpile upする。②PAS染色により細胞質内陽性像を認め，amilaseで消化されることにより，細胞質内にグリコーゲンを有している。alcian blue染色は陰性で粘液産生能は認められない。③第17代細胞の倍加時間は約49時間，細胞密度は $3.0 \times 10^5/cm^2$ ，コロニー形成能は23%であった。④核DNA量は2.1Cと4.1Cにピークを有する二峰性のヒストグラムを示した。⑤培養上清中の腫瘍マーカーは対照培地と比べ，CA125，TPA，CA19-9，SLXが高値を示した。⑥ヌードマウスに移植可能で原腫瘍によく似た組織像を示し，同様の染色性を示した。

【結論】本細胞株は，数種の腫瘍マーカー産生能を持ちならびに異種移植能を有し，子宮体部明細胞癌研究に有用であると考えられる。

18 子宮体癌の予後判定因子について

群馬大
大和田信夫，永山雅之，小菅利弘，塚越俊夫，
伊吹令人，五十嵐正雄

〔目的〕子宮体癌の予後の判定を，多くの特性因子から，5年未満死亡群と5年以上生存群の2群に判別，予測することを目的とし，数量化理論第2類の判別分析を用い分析した。〔方法〕1984年12月までに当教室で治療された子宮体癌137例を対象とし，年齢，進行期，分化度，閉経の有無，導入化学療法，維持化学療法，発育形態，筋層浸潤，リンパ節転移，腹腔内洗浄細胞診について，その質的データをもとに，数量化理論第11類の判別分析により，I群（5年未満死亡群，11群）5年以上生存群の2群への弁別を行った。分析にあたっては，I群，11群への弁別に寄与する各項目，区分の〔重み〕を求めて，その〔重み〕から各項目，区分の臨床的意義についての要因分析を行った。次に，各項目，区分に該当する〔重み〕の総和を個々の症例について算出し判別分析を行い，両群を弁別する区分点と判別の中率を求め弁別の効果を検討した。〔成績〕1.単独項目では，進行期，分化度，発育形態，筋層浸潤と予後との関連が強いことが示された。2.判別分析による多項目と予後の関係についてみると，偏相関係数は腹腔内洗浄細胞診が0.317610と最も高く，次いでリンパ節転移の0.302378，導入化学療法の0.210957，発育形態の0.197194，分化度の0.191503，筋層浸潤の0.168883であり，多項目の関連の中でも予後と密接な関連が認められた。3.判別区分点は0.2817であり，判別の中率は86.1%であった。4.判別非的中例19例中17例（89.5%）は判別区分点0.2817±0.5の範囲内にあった。〔結論〕初回手術時に得られた所見から予後得点を求めることにより，各症例の病期を把握することができ，予後の判定や治療に有用であることが示唆された。